

425 慢性肝炎における肝シンチグラムの有用性 —組織との比較

弘前大学第1内科 木村剛典、和田一穂、鈴木明夫
大川正臣、石沢誠、坂田優、
小松良彦
同 放射線部 長内恒美

慢性肝炎の診断には組織所見は必須のことであるが、より簡便な肝シンチグラムにより、病勢や程度を判定すべく、組織所見との相関を検討した。症例は1981年1月より1982年12月までの26例（男性20例、女性6例、平均年齢34才）を対象とした。疾患は慢性活動性肝炎11例、非活動性6例、持続性肝炎9例であった。肝シンチグラフィはTc-99m-Sn-colloidを3~5mCi静注により撮像した。肝シンチグラム（Ohio Nuclear Sigma 410）はComputer処理し、一定cell内の脾（L）脾（S）骨髄（BM）のuptake、各臓器間の比を求め、組織はPeacemeal necrosis（PN）、Portal fibrosis（PF）、Kupffer cell数（K）を当科の基準で評価（Grade 1~5）両者をと比較した。この結果、PNとL/BM、PFとL/BMに相関がみられた。肝シンチグラムは慢性肝炎の組織所見のうち最も重要であるPNとPFをよく反映し、活動性、非活動性の鑑別に有用であると考えられた。

426 脂肪肝の肝シンチグラム像 —特に限局性脂肪浸潤の肝シンチグラム像について—

工藤正俊、平佐昌弘、伊吹康良、藤見勝彦、上田俊二、
冨田周介、小森英司、藤堂彰男、北浦保智（神戸中央
市民、消内） 栃尾人司、才木康彦、山口晴二、伊藤秀臣、
池窪勝治（同、核医学科）

近年、Echo、CT等の画像診断機器の進歩普及に伴い、これ迄びまん性の肝疾患と考えられていた脂肪肝において脂肪浸潤が必ずしも均一に進展せず限局性に或いは不均一に分布する事が証明される様になって来た。今回我々は、脂肪肝、特に限局性脂肪浸潤の肝シンチグラム像について検討を加えた。

1982年1月より1983年4月迄の16ヶ月間に当消化器内科において腹腔鏡下肝生検により脂肪浸潤の確認された24例を対象とし、同時期に肝生検の施行された慢性肝炎30例、急性肝炎31例をControlとして対比した。

肝腫大、RIの不均一分布が脂肪肝において高率に認められたが特異的な所見とは言えなかった。又、限局性脂肪浸潤と考えられた例は4例であったが、所見の内訳は脂肪浸潤が高度の部位に①RIがhotに集積するもの1例②defect 1例③RI集積の差を認めないもの2例と様々であり、Kupffer cellの動態を考える上で興味深い所見と考えられた。

427 肝シンチグラム欠損例における腹腔鏡所見の検討

塩見 進、針原重義、黒木哲夫、門奈丈之、
山本祐夫（大阪市大、3内）
越智宏暢、小野山靖人（同、放射線科）

肝シンチの画像解析に影響を及ぼす因子を知る目的で、肝シンチ所見と腹腔鏡肝表面像を対比検討した。

対象および方法：過去13年間に当科にて肝シンチグラムと腹腔鏡検査をはば同時期に施行した682例を対象とした。肝シンチでの欠損様所見と腹腔鏡での肝表面異常所見の適合度は χ^2 -検定により検討した。成績：(1)肝シンチでの欠損様所見は288例（42%）に認められ、そのうち腫瘍性病変は58例に認められた。(2)腫瘍性病変を認めない230例のうち腹腔鏡で異常所見を認めたのは121ヶ所（114例）であり、その内訳は癒着38ヶ所、陥凹25ヶ所、肝の変形、萎縮20ヶ所、その他38ヶ所であった。一方上記288例中腹腔鏡にて異常所見を認めなかったものは139ヶ所（131例）であり、肝硬変で出現頻度が高かった。部位別には肝門部53/80（66%）、胆嚢床47/102（46%）、右葉26/90（29%）、左葉13/71（18%）であった。(3) χ^2 -検定を用いた適合度の検討では、シンチでの欠損様所見と腹腔鏡での同部位の陥凹病変が高い適合度を示した。

428 ^{67}Ga -citrate 集積の経時的变化による Hepatoma 診断の意義

葦沢龍人、近藤邦雄、有吉 寛、木戸長一郎
（愛知がんセ、放診）

我々は、正常肝および各種肝疾患86例に対する ^{67}Ga -citrate 集積の経時的变化を比較し、Hepatoma診断に対する有用性を検討した。測定方法は、 ^{67}Ga -citrate 3mCi静注後、64×64matrix内に肝全体あるいは腫瘍部および非腫瘍部を関心領域として設定し、6、24、30、54、78時間毎に、前面、後面像のcount収集を行い、その合計から1pixelあたりの平均値を算出した。次に、6時間値を100として各時間値を補正し、time relation curveを求め、そのcurve patternを3型（TypeI減少型、TypeII平坦減少型、TypeIII増加減少型）に大別した。TypeI・IIは、正常肝37例、各種肝疾患32例（うちHepatoma5例）に認められた。一方、TypeIIIはHepatoma14例、正常肝3例の計17例であり、他の肝疾患では認められなかった。TypeIIIをpositive、TypeI・IIをnegativeとすると、Hepatomaに対する診断率は、sensitivity 73.7%、specificity 92.5%、positive predictive value 82.4%、negative predictive value 88.1%であり、質的診断を目的とした場合、本検査法の意義は高いと考える。